

# 北宋時代の宦官世族・再論―真定王氏を中心に

藤 本 猛

## 要旨

『宋史』宦者伝に載る王忠規は、北宋中期に活躍した宦官であるが、『宋史』の記事からだけではその家族関係は不明である。しかし『続資治通鑑長編』などに残る断片的な史料を突き合わせれば、彼は真定王氏の一人であり、その一族は代々北宋王朝に仕えた宦官世族であることが判明する。その第一世代・王文寿は太宗に仕え、輜重や文化事業に従事したが、四川での軍事行動中に部下に暗殺されてしまう。その養子・王承勛は真宗に仕え、治水や文化事業に従事し、養父よりも高位に昇った。その養子・王守忠は仁宗に仕え、謹厳実直な性格から皇帝・皇后らから信頼を得た。その結果、彼はそれまでの宦官が得ていなかったような恩典を受け、入内内侍省・内侍省・兩省都知という特殊な地位に就き、さらに現役のままで節度觀察留後の遙郡に到った。彼は文官士大夫から批判を受けながらも、宦官官僚として新たな局面を開いた大宦官であり、その経歴を復元することは、宦官研究の上で有用なことであろう。かかる大宦官の王守忠について、現行『宋史』が伝を立てていないことには問題を感じる。このことから分かるように北宋時代の宦官を研究するためには、現存する史料を収集し、可能な限りその経歴を復元することがまず必要となる。そうすることではじめて宦官世族であった真定王氏の存在が明らかにできるといえる。

## はじめに

筆者はかつて「北宋時代における宦官世族―開封李氏の例を中心に」と題した小論を物し、北宋時代の宦官らが養子をとって「家」を継承し、財産などをつないでいったことを明らかにした。また、北宋

初期には、宮中に飼養する宦官らの数を制限したことから、北宋宮廷においては、一定の宦官一族が代々祇候する体制となっていたと推測した。そしてそのような「宦官世族」の代表として、李神福・李舜拳に代表される一族を五代にわたって觀察した。<sup>(註1)</sup>

その後、継続して史料を収集し、他に類似の「宦官世族」がないも

のかを探ってみた。しかし元来、北宋時代においては政治的に大きな影響力を持たないと考えられ、当時新たに出現した文官士大夫からは蔑視される傾向にあった宦官に関する史料は絶対数が少なく、かつ時折出現する宦官らについても、特に彼らの家族関係への言及はほぼ見つけられない。特に幾人かの宦官に関する、まだしもまとまった履歴を載せる『宋史』宦者列伝の記事は、宦官の字<sup>あざな</sup>なども記載して貴重な情報を提供してくれるが、概して北宋前半に詳細である一方、北宋後期から南宋にかけての情報は少なく、これは『宋史』編纂時に基づいた国史・実録の精粗にもかかわっていると思われる。

だが一方で、諸史料を見ていると皇帝や士大夫らとかわる場面<sup>あき</sup>で、あるいは武官による軍事行動の端々に、多くの宦官が姿を見せている。この際、彼らがいかなる立場にあり、どのような活動を行っていたかを理解しておくことは、当該時期の研究にとって等閑視できないものである。しかし現状では零細な史料が散見されるのみで、ある程度の体系的な、あるいは時系列に沿った彼らの活動を確認することが求められる。このような試みは、すでに何冠環氏が試みられ、特に閹承翰に始まり、文應・士良・安とつづく閹氏の事跡を考究され、一連の成果は著書にもまとめられている<sup>(註2)</sup>。そこで今回も氏の鑿みに倣い、史料中からうじて見つけることのできた「宦官世族」の活動を跡づけ、ひいては宦官の政治的活動をたどることとしたい。

仁宗朝から神宗朝にかけて活動したと考えられる王守規は、『宋史』宦者伝に立伝されている人物であるが、実はその兄・王守忠も高級宦官で、両省都都知という非常に特殊な地位に昇った人物であった。そのような人物が『宋史』に立伝されていないところに、宦官研究の困難さが浮き彫りになるが、その他史料を調べていくと、彼らの家系(養父子関係)が、少なくとも四代にわたって北宋の歴代皇帝に仕えた「宦官世族」であったことが判明する。王守規は『宋史』に「真定欒城の人」と書かれている。宦官は宮中に奉仕することが多いため、とくに世代を経ると、本貫を「開封(大梁)」とするものが多いが、この一族は真定欒城を本貫としつづけたのであろう。よって本論では、現存する諸史料を突き合わせて、この「真定王氏」の活動を跡づけてみたい。

## 一・王文寿(第一世代)

真定王氏の第一世代といえるのは、王文寿である。北宋第二代太宗皇帝に仕えた彼の事跡はあまりはつきりせず、しかも非常に不名誉な末路をたどっている。

確認できるかぎり、彼が史書に初めて登場したのは太平興国六年(九八二)で、そのときの官銜は「殿頭高品」であった。接収した旧南唐領域の実情について、贊善大夫の韋務昇とともに建議している。

その内容はいえ、かつて南唐の支配下においては、税三千以上を納めたり、家族の多い家から義勇軍を選抜した際、一族につき一人、顔に入れ墨をさせ、平時には戦時に備えて武器を納めさせたり、戦時には軍糧を支出させたりしていた。彼らは、南唐が滅びて北宋に接収された後、帰農させられたものの、軍隊生活に慣れてしまつて農作業を喜ばず、力役に雇用されたり、賊になる者が多く、民の害になっていた。そこでそんな者たちの中から、軍に耐える者を選び、家族とともに開封に移すことを提案したのである。これは募兵で成り立っている北宋禁軍に、旧敵国の軍属的な者らを接収することで、軍事力の増強と地域の治安維持という一挙兩得を得ようとするものであった。この提案はさっそく採用され、中央禁軍を統括する三班に詔が下され、二人を江南に派遣し、転運使とともに状況を検討し、メリット・デメリットについて調査報告をするように命じられている。<sup>(註3)</sup> このときもに提言をしている章務昇は、太平興國年間になって対北漢作戦の一環として、河東西路の転運を副使として担当し、<sup>(註4)</sup> 陝西河南路転運使であるときには部下の不始末（横領）に連座したことが分かっているの<sup>(註5)</sup>で、軍事活動が行われている前線近くでの経済活動、つまり兵站・輜重関係で活躍した人物であった。

一方、王文寿がこのとき所持していた「殿頭高品」は北宋初期にあった宦官官位であり、のち真宗朝に「内侍殿頭」と改称され、内侍省（あ

るいは内内侍省）内で供奉官に次ぐ地位にあった。<sup>(註6)</sup> 中級宦官といったところであろうか。すでにに出仕して一定程度の時間が経っていたものと考えられる。

次に王文寿の活動が知れるのは、二年後の太平興國八年（九八三）のこと。道教への嗜好で知られる太宗ではあるが、インドなど中央アジアから来た僧侶らに、太平興國寺の一角を与え、訳経院（のち伝法院と改称）として經典の翻訳作業に従事させていた。従来このような翻訳作業が幾度も途絶してきたことに鑑み、この年、開封の年少者五十人を集め、梵語に関する学問、あるいは仏教学（「梵字学」）を習得させようとし、それを差配したのが王文寿であった。<sup>(註7)</sup>

数年後の雍熙四年（九八七）には史館に詔して『神醫普救方』という書物を編集（輯佚か）させたが、このとき「中使」王文寿にその監督をさせている。<sup>(註8)</sup> これらの活動は、いずれも国家的文化事業の監督役であり、内廷に仕える宦官らしい活動といえた。ただ訝しいのは、前者に見える王文寿の官衛が「高品」であることで、これは先の『長編』大中祥符二年の記事から見ると、「殿頭高品」よりも一ランク下の内侍省官位であり、史料の誤りで無ければ、この間に何らかの降格処分を受けている可能性があるが、史料上それを確認することはできない。

そして最後に確認できる王文寿の事跡は、至道元年（九九五）のも

ので、ここで王文寿は大きな失敗を犯すことになる。つまり巴蜀地方（四川）で蜂起した王小波・李順の乱において、軍の統率に失敗し、部下に殺害されてしまうのであった。もともと淳化四年（九九三）に茶商の王小波らによって起こされた均産一揆は、同年宋軍と戦って王小波が敗死したあと、その妻の弟であった李順によって継続され、より大規模化する。李順は「大蜀王」と称して成都を拠点に独立の構えを見せた。この事態に太宗は、宦官の王繼恩・馬知節らに命じて鎮圧軍を編成し、大規模な攻勢をかけた。翌年二月には成都を回復したが、この際三万もの命が奪われたという。<sup>(註10)</sup> そのあと王繼恩はそのまま配下の宦官らに諸軍を率いさせ、四川の各地で残党狩りを行わせたのであるが、その中に「高品王文壽」がおり、彼は虎翼軍の兵二千人（史料によつては三千人）を率いていた。しかし当時、総大将の王繼恩自身が功を頼んで成都で宴をひらき、部下を放つては市中で劫掠させていたというから、王文寿ら各地に派遣された残党狩りも、各地を慰撫して回つていたとはいっても、実際は四川各地を荒らしていたことが想像される。挙げ句、王文寿は、部下を督すること急であつたために士卒の恨みを買ひ、とうとうある夜、宿営中に配下の西川行営指揮使・張嶸に襲われ、刀で首を斬られてしまう。かがり火で王文寿の首を確認した張嶸は、そのまま配下五百を率いて賊に合流してしまふ。<sup>(註11)</sup>

以上が王文寿について分かる情報である。彼はもともと補給や文化

事業に参加することが多く、兵を率いた経験はあまりなかったと考えられるが、王繼忠に従つて宦官中心の反乱鎮圧軍に参加することになった（これももともと輜重関係であることが想像されるが）。首尾よく目的を達成した後、残党狩りに従事したが、実際は略奪行為にのみ心を急がせてしまったこと、くわえて軍の指揮に不慣れであつたことから部下の統御がうまくできず、恨みを買つて殺害されてしまったのであろう。いずれにせよ名誉な死に方とはとうてい思えず、むしろ咎を負うこともあり得たかもしれないが、太宗が彼をどのように見ていたかを示す史料はない。

## 二. 王承勛（第二世代）

第二代太宗に仕え、不名誉なかたちで命を失つた王文寿だが、彼には養子がいた。それが、王承勛である。彼も『宋史』に伝はなく、細かな履歴が判明しないが、王文寿との関係は、確認できる彼の初史料『長編』巻七〇の記事によつて知られる。このとき王承勛は「入内高品」として第三代真宗に仕え、数年前に澶淵の盟を結んで間もない大中祥符元年（一〇〇八）、契丹から来た賀正旦使の待遇について、真宗に提言を行つてゐる。<sup>(註12)</sup> 彼らに対する御礼品のグレードについての提言であるので、入内内侍省においてそれらを取り扱う部門の責任者

になっていたであろう。このとき養父の死からすでに十四年経っていたが、王承勛は入内内侍省で、養父と同ランクの官位に至っていたことが分かる。

翌年、王承勛は詔をうけ、漳河水口が塞がった洺州の現場を視察したのか、現地で作業を監督する幕職官への褒賞を進言している。<sup>(註13)</sup> 洺州は河北西路に所属する州で、太行山脈に源を発する漳水が州の中央を南から北まで貫き、大陸澤に流れ込み、そこからさらに北東へ、最終的に渤海へとつながっていた。周知のように北宋時代の黄河は、それ以前の時代と比べても非常に頻繁に氾濫し、この地域に深刻な影響を与えていた。特に慶暦八年(一〇四八)には濮陽で大規模に決壊し、東行していた河道が大きく北に移動し、漳水の一部もそこに合流するようになる。そこまですらなくとも、黄河は何度も洪水を繰り返しており、それは『宋史』の該當箇所を見ればよく分かる。<sup>(註14)</sup> 漳水も制御が難しい川であり、古く戦国時代の西門豹が治水・灌漑事業を行ったのもこの漳水や河水であり、王承勛が視察に行ったこのときより十年前にも大きな洪水が発生し、千軒以上の民家が被害を受け、十家族が溺死している。<sup>(註15)</sup> 件の幕職官が監督していた土木事業とは、この漳水の治水堤防工事であつたと考えられる。

しかしながらおそらく特使として現場視察に伺った宦官に、現地で働く州官の昇進を進言する権限はなく、この提言は否決されている。

それも当然のことで、特使が現地に赴いた場合、手厚い待遇がなされたことは想像に難くなく、そこで賄賂を受け取って人事に介入する不正は大いにあり得た。よって王承勛のこの提案が私心のないものであつたとしても、前例を作るわけにはいかなかっただろう。

このときの官銜は「入内供奉官」となっている。入内内侍省の序列としては最高位であり、これ以上になるとときには諸司使副に寄資することになる。<sup>(註17)</sup>

大中祥符三年(一〇一〇)には瑞聖園という庭園の管理を担当している。<sup>(註18)</sup> この庭園は、玉津園とともに朝廷が管轄する庭園で、開封新城(外城)の北にあり、太宗によつて「含芳園」と名付けられ、三班使臣と内侍宦官によつて管轄され、兵によつて警備された場所であつた。その庭園の改名を願ひ出たのが王承勛であつた。詔があり、園名は「瑞聖園」と改名された。

これより二年前の正月、いわゆる「天書」が降下した。前年末に真宗が夢で見たお告げの通りで、真宗はこれを奉じてのちに泰山封禪を行うこととなる。実際は、景德元年(一〇〇四)に契丹(遼)と結んだ澶淵の盟で傷ついた威信を取り戻すため、王欽若らによつて捏造された事件であつたとされる。<sup>(註19)</sup> その天書は、都合三種存在した。正月に承天門の屋根に引つ掛かつていた黄色い絹布の天書で、<sup>(註20)</sup> 「大中祥符」と改元するきっかけとなつたもの。四月に宮中の功德閣に降つたも



の<sup>(註21)</sup>、そして六月、泰山で前月湧き出たという醴泉の北に降ったもの、の三つである。うち泰山の天書は、その月のうちに都・開封まで運ばれ、まず安置されたのが含芳園であつた。そのとき五色の雲が出現し、黄色い気が鳳凰の形となつて宮殿上に宿っているかのようにだつたとい<sup>(註22)</sup>う。真宗は直々に含芳園まで行幸し、天書の文字を確認し、宮中に迎<sup>(註23)</sup>え入れた。その年の十月、真宗は泰山で封禪を行つた。

そこから二年が経つた大中祥符三年に、天書が一時奉安された故事をもとに王承勛が改名を願ひ出たのであるが、これは多分に示唆的であつた。というのは、真宗はこの翌年春に今度は汾陰で地を祀る行幸を行つており、前年にその挙行を決定している。つまり当時すでに封禪が終了し、その熱が冷めかけたところで、次のイベントに向けての雰囲気作りが行われている時期であり、そこに来たのが含芳園から瑞聖園への改名であり、延いては封禪のきつかけともなつた天書の存在を思い出させることであつた。王承勛の行動は、やはり当時の真宗の思惑に沿つて行われたものであろう。

王承勛と天書とのつながりはさらににつづく。汾陰での后土の祀りが終わつて五年後の大中祥符九年（一〇一六）八月、西京左藏庫副使、帶御器械となつていた王承勛は、同玉清昭應宮都監となつてい<sup>(註24)</sup>る。玉清昭應宮は天書を奉じするため、開封宮城の真北に建てられた道観であり、その次席監督官となつたのだつた。このときの王承勛はす

でに寄資として諸司副使の西京左藏庫副使を持っていた。七年前の供奉官よりも数ランク上位に昇進している。また、帶御器械は咸平元年（九九八）四月に改制された、比較的新しい軍事関係の差遣である。後年の規定にはなるが、宦官の差遣としては御藥院など主要なものを経たのちに内侍押班か帶御器械に就く、とされており、高級宦官の域に達しているといつてよいであらう。

このように、現在確認できる履歴としては、真宗に一貫して仕えてきた王承勛だが、その官銜が最後に確認できる史料は、真宗崩御後の葬儀に関わるものであつた。大中祥符末から体調不良が続いていた真宗は、天禧中（一〇一七～一二）には言語不明瞭で、精神も不安定となり、劉皇后が政務を代行するようにもなつていた。そしてとうとう乾興元年（一〇二三）二月戊午（一九日）、延慶殿で崩じた。享年五十五、在位は二十六年だつた。三日後には宰相が山陵使に任じられるなど、葬儀の次第が決められていったが、その中で内侍省押班の王承勛が按行副使となつてい<sup>(註25)</sup>る。御陵（永定陵）の境域を実地調査する役割であつた。当然ながらこの際、高級宦官はほぼ真宗葬儀・埋葬に関わる各種役割を果たしており、王承勛も先輩である入内都知藍繼宗とともにその役目を果たしていたのである。当時彼は内侍省の押班であり、名実ともに内侍省の幹部となつていた。

このように王承勛は真宗に仕えて内侍押班にまで昇つた。横死した

養父とは違い、順調に出世をしたといえるだろう。彼の活動が最後に確認できるのは、仁宗朝の景祐二年（一〇三五）で、広平の羣牧監を廃止する詔が出されたとき、ここが千頭以上の馬を養う良い馬場であるとともに、「先朝」真宗が設置したところであることから、廃止することに反対している。結果、広平監を存続させる詔が出された。<sup>(註34)</sup>一度廃止とする詔がすでに发出されていたにもかかわらず、それを撤回させたところに、当時の王承勛がベテラン宦官としてそれなりの発言力を持つていたことが推測される。またその理由の一つが、先帝真宗がお創りになったものだから、としたところに、長年仕えた真宗への想いが窺えると思うのは穿ち過ぎであろうか。

王承勛がいつ没したのかは分からないが、死後、寧國軍節度使と「安簡」という諡が贈られたことは判明している。<sup>(註35)</sup>その史料からは、すでに生前「宣慶使」であった可能性があるが、これは大中祥符元年（一〇〇八）に李神福のために設けられた、特別な高級宦官官職であった。<sup>(註36)</sup>そして追贈ではあっても武階の中で最上位である節度使を贈られている宦官は決して多くない。そこからしても王承勛は充分に高級宦官であったと言えるだろう。その彼であっても『宋史』に立伝されず、細かな履歴が分からないのが、当時の宦官に対する実情である。第二世代である彼の養子が、第三世代の王守忠・守規兄弟であるが、「真定王氏」はこの第三世代でさらに飛躍することになる。

### 三. 王守忠（第三世代）

真定王氏の第三世代に当たるのは王守忠・守規の兄弟である。その家族関係は、『宋史』の王守規伝に「王守規は入内都都知守忠の弟」とあることと、<sup>(註37)</sup>『長編』の記事に「王守規は承勛の幼子なり」とあることによつて知られる。<sup>(註38)</sup>正史である『宋史』でこの兄弟について知ろうとすると、弟・守規が『宋史』に立伝されている一方、兄・守忠は弟の伝に「兄の守忠は真宗に仕え、誠実素朴で注意深く、皇帝に遇されること最も厚かった。」と記されるのみで、ともすれば兄はあまり活躍しなかったかのように思われがちである。だが他の史料を突き合わせてみると、実は兄が仕えたのは第三代真宗ではなく第四代仁宗であるし、むしろ兄の方が弟よりも高位に昇っており、はるかに重要な役割を果たした人物であった。<sup>(註39)</sup>

王守忠は「儲邸の舊恩」「東宮の舊恩」によつて仁宗からの信頼が厚かったとあるから、<sup>(註40)</sup>仁宗が即位前の太子時代から仕えていたと思われる。そのような個人的な紐帯が基礎にあったことから、のちに見るような厚遇を受けることになったのであろう。景祐三年（一〇三八）、現在確認できる最初の史料で、すでに王守忠は内侍副都知となっており、さらに儀鸞使の寄資、雅州刺史の遙郡を持つていたため、<sup>(註41)</sup>養父・王承勛の極官を凌駕していた。このとき彼は澶州修河鈴轄となり、黄

河の治水事業に従事している。その功があつたのか、五ヶ月後には他の宦官らとともに昇進し、寄資が諸司使の最高位である皇城使に昇つて<sup>(註45)</sup>いる。

康定年間（一〇四〇）に入ると北宋は西夏と交戦状態に入る。緒戦に出遅れた宋側は三川口の戦で手痛い敗北を喫し、將軍劉平が西夏の捕虜になってしまう。慌てた宋廷は枢密使の夏守贊を陝西都總管・經略安撫使として転出させ、初期対応に当たらせた。直後、王守忠は翰林学士の晁宗慤とともに督戦のために赴いている。<sup>(註46)</sup>翰林学士と宦官はともに皇帝に近侍する存在であるから、この二人の派遣は皇帝直々の特使だと認識されていたと思われ、前線の官僚らに与える心理的影響は大きかったと考えられる。

さらにここから戻つてすぐであろうか、あるいは現地に赴いたままであろうか、同年二月、王守忠は今度は正式に陝西都鈐轄に任じられ、実際に現地の軍事活動に従事することとなった。<sup>(註47)</sup>だがこの処置が、士大夫から反発を招くこととなる。王守忠の陝西都鈐轄就任を聞いた知諫院の富弼は、すぐさま反対の上奏を行った。曰く、すでに武官・文官が現地の指揮官として派遣されている上に、さらに宦官を派遣するということは、これは実質的に監軍として現地の軍事活動を監視する役割を担っていると考えられ、それは皇帝が文武官を信用しなくなつたとの表明に近く、唐末の宦官跋扈につながる、というので

ある。<sup>(註48)</sup>王守忠個人に対する問題提起ではなく、宦官が監軍として活動することに對する警戒感であつた。<sup>(註49)</sup>

しかしこの上奏にもかかわらず、王守忠は陝西でしばらくの間活動し、追つて任命派遣された陝西隨軍轉運使の明鎬を交えて、夏守贊とともに戰略會議を開いている。<sup>(註50)</sup>五月には詔が出され、三ヶ月に及ぶ膠着状態を打破すべく、夏守贊と王守忠は贊州へ進撃するよう命じられた。<sup>(註51)</sup>ところが、そのわずか五日後、夏守贊と王守忠はそれぞれ陝西都部署、都鈐轄を罷免され、都へと召還されたのである。<sup>(註52)</sup>

ところで、この陝西都鈐轄に任じられたときの王守忠の官銜は、「皇城使、文州防禦使、入内副都知」で、四年前と比べれば、寄資の皇城使には変化がなく、遙郡が刺史から防禦使に昇っており、それがさらに都鈐轄任命とともに觀察使に上げられている。遙郡としてはあと節度觀察留後しか残つておらず、これはかなりの優遇措置であつた。内侍省関係の宦官官職としては、内侍省の副都知だったのが入内侍省の副都知に移っており、やや昇進していたといつてよいであろう。それが翌年の慶曆元年（一〇四一）には「内侍右班都知」となつており、<sup>(註53)</sup>また内侍省に戻つた上で、二人いるうちの下位ではあるが省の統括者となっている。ここから見れば、前年の都鈐轄罷免は、それほど人事上のマイナスではなかつたことが窺える。

この慶曆元年の記事というのは、対西夏戦という事態に對応すべく



同年新たに創設された万勝軍について、<sup>(註52)</sup> 体格を考慮した募兵を行うように提言したもので、都鈴轄ではなくなったものの、軍事方面に関心をもち続けていたようだ。さらに翌年には、入内都知の張永和とともに、有能な武官二人を推挙するよう詔を受けている。<sup>(註53)</sup> 宦官を統括する者として、その人脈から特に命じられたものであろう。このとき、入内内侍省のトップと二人で、「内侍都知」として詔を受けていることから、すでに下位の長官である「内侍右班都知」ではなく、内侍省の正式な長官になっていたのかもしれない。

軍事関係の命令を受けることはさらにつづき、翌月には軍事的才能のある文官を選抜すべく、その試験の担当を命ぜられている。<sup>(註54)</sup> このときも翰林学士とセットで対処させられており、やはり皇帝直々の選抜であることが示されたものであろう。事ほどさようにこの時期は、対西夏戦が継続中で、軍事増強の必要性が高まっていた時期であった。

この対西夏戦で活躍した范仲淹が抜擢され、十項目の改革案が出されて、いわゆる慶曆新政がこころみられるのが慶曆三年（一〇四三）のことだが、この間、王守忠がどのような行動をとっていたかはよく分らない。その新政が進展し、やがて反対派の攻撃を受けて改革が頓挫することになる慶曆四年（一〇四四）のはじめ、太宗の第八子で「八大王」と呼ばれた荆王元儼が亡くなった。非常に優秀であったがゆえに、生き方が難しかった人物だが、仁宗から見れば皇叔にあたる宗室

の重鎮であった。仁宗は喪に服して政務を五日間休み、その葬儀を翰林学士の宋祁と内侍省都知の王守忠に取り仕切らせた。宋祁は荆王の墓誌銘をも記している。<sup>(註55)</sup> 新政を行っている范仲淹は、荆王（追贈されて燕王）の葬儀について、品位を損なわない程度で、過剰な費用をかけぬよう意見している。<sup>(註56)</sup>

その范仲淹がやむなく参知政事を辞任し、新政が挫折したのは慶曆五年（一〇四五）であった。その前年十二月、二年ばかりの交渉を経て、宋と西夏との講和がようやく実現した。いわゆる慶曆の和約である。しかし締結までには、国書の文言であったり、領土・歳幣の条件を調えるために頻繁に使者が往来した。それへの対処を宦官らが務めていたのであろう、五年三月、責任者である入内都知張永和、入内副都知劉從愿と内侍都知王守忠が特別な昇進を許されている。<sup>(註57)</sup> このとき王守忠は寄資が皇城使から昭宣使となり、いよいよ宦官専用の内侍加官の領域に入った。

その後慶曆七年（一〇四七）には、やはり翰林学士とともに南京（宋州応天府）にある鴻慶宮に三聖御容（太祖・太宗・真宗三代の肖像）を奉安する儀式を取り仕切っている。<sup>(註58)</sup> このとき宦官官職は入内都知に遷っており、入内内侍省のトップとなっていた。

慶曆八年（一〇四八）、宮中で大きな事件が発生する。この年は正月が閏月となっており、二度目の正月がやってきていた。そこで仁宗

は曹皇后の諫止も聴かず、閏正月十五日にも二度目の元宵節の上元観灯を行った。その三日目の夜、まだ観灯がつづけられていたであろうが、衛士数人が屋根から寝殿である福寧殿に侵入し、切りつけたものか、宮女に傷を負わせ、その悲鳴が皇帝の寝所にまで響き渡った。仁宗は外に出ようとしたが、一緒にいた曹皇后が止め、逆に部屋を閉めて堅く守ると、女官を走らせて王守忠に兵を率いて護衛に来るように伝えさせた。宦者の何承用は側近くにいたのであろう、仁宗が驚いてはいけなと、悲鳴はただの喧嘩であると奏したが、皇后は「賊が殿下で人を殺しているときに、仁宗が外に出てしまうかのような嘘をなぜ吐くのか」と言つて叱りつけた。また賊が必ず放火しようとすることを予見し、宦官に水を持つて消火に回らせ、その宦官らが怖じ気づかぬよう、彼らの髪を切つて証拠とし、事が済んだら必ず褒賞することを約束した。これにより宦官らが奮起し、賊はたちまち捕らえられたといふ。<sup>(註99)</sup>

この事件で印象的なのは、曹皇后の水際立つた対処の仕方である。曹皇后は宋初の名將曹彬の孫女で、郭皇后の廃后問題で混乱したのち、名族から迎えられた皇后である。彼女がこの咄嗟のときに呼び寄せたのが王守忠であった。王守忠がその後この事件でどのような活躍をしたのかは書かれていないが、賊の捕縛に貢献したことであらう。<sup>(註100)</sup> 半年後、王守忠は祭器の補修事業を行ったことにより昇進するの

だが、そこにはこの事件時の活躍への褒美も含まれていたかも知れない。<sup>(註101)</sup> しかしながら、この昇進が侍御史知雜事の何郊によつて大きな反対を受けることになる。

何郊によると、当初聞いたところでは、王守忠の加官を昭宣使から一段階飛ばして宣慶使に昇すということだったが、翌日になると遙郡を節度觀察留後にすることだった。それが結局のところ、加官は景福殿使にまで一気に昇進させ、<sup>(註102)</sup> 遙郡は觀察使に据え置く代わりに、節度觀察留後の俸給は与えるということになった。そもそも祭器補修は死力を尽くすほどの仕事ではなく、宣慶使にするだけでも十分すぎるものである。それに宦官の遙郡は觀察使に止めるというのが祖宗の制であるから、節度觀察留後の俸給は撤回してもらいたい、というのが何郊の主張であつた。<sup>(註103)</sup> しかしこの上奏は容れられることなく、王守忠は遙郡觀察使のまま、節度觀察留後の俸給を受けることとなつた。

するとその三ヶ月後、王守忠は正式に武信軍留後となり、あつさりとこれまでの慣例を超越する好待遇を得ることになる。<sup>(註104)</sup> そしてさらに詔があり、今度は十二月四日にある紫宸殿の宴で、「正班」すなわち正規の留後の座席に座ることが許されている。王守忠のように実際には内侍省などで現職のある官僚が觀察使などの遙郡を所持している場合、俸給面で優遇されてはいても、宮中序列においては現職のところ

に在るべきものであった。それが特別に正規の節度觀察留後と同じ扱いを受けるという。まさに破格の待遇であった。<sup>(註65)</sup>

当然ながらこれに対して、やはり何郟が反対の上奏を行う。閤門より紫宸殿の宴での座席表が回ってきたが、王守忠の席次が楊景宗の次にきており、宦官でありながら昇殿することになり非常に不都合である、と。<sup>(註66)</sup> 錢晦もまた反対の上奏を行ったという。<sup>(註67)</sup> これを耳にした王守忠は宴を欠席した。<sup>(註68)</sup> 争いを避けたのであろう。

だが、この問題は今後とも続くものであったため、御史台に詔があり、王守忠が群臣と居並ぶことができるかどうかを、閤門とともに検討させている。いまその史料をみると、朝会の際の正任刺史・觀察使以上である宦官の序列はこれまで決められておらず、皇帝と群臣との宴席の場に宦官が参加するときの決まりも存在していない。そこで改めて検討した結果、今後は宴席には参加しないこととし、朝会の際には景福殿使の席次とすることになった。<sup>(註69)</sup> この時点で、すでに王守忠の立場は、前例のない領域に達していたことが分かる。

王守忠は遙郡の最高位・節度觀察留後を帯びつつ、入内内侍省都知として変わらず職務をこなすことになる。皇祐二年（一〇五〇）には翰林学士承旨・右司諫・三司とともに朝廷の歳入調査を命じられ、二年をかけて調査を担当する。<sup>(註70)</sup> 数年前に終熄した対西夏戦など情勢の変化によって、歳入の具合が以前とは異なってきたためであろう。

すでに入内内侍省都知として宦官官庁のトップであった王守忠だが、皇祐二年十月には、通常は置かれないうに上の特別職・入内都都知になっている。<sup>(註71)</sup> やはり破格の待遇といつてよいだろう。<sup>(註72)</sup> ついには皇祐五年（一〇五三）、王守忠は入内内侍省のみならず、内侍省にまでまたがって、両省を支配する都都知となる。これは前代未聞のことである、やはり台諫官による反対の上奏が行われたが強行され、今回限りという詔を引き出すのがせいぜいであった。<sup>(註73)</sup>

このころになると王守忠に対する仁宗の厚遇ぶりには歯止めがきかないかのような状態になっており、当時の士大夫らもそれに神経をとがらせていた。宦官官職は両省都都知というあり得なかつた地位となり、寄資に系統づけられる加官においても延福宮使となっている。ま、彼らが最も警戒していたのは、残る遙郡が通常ではありえない節度使にまで昇ることであった。高若訥は王守忠が節度使を狙っているものとして、常に警戒していたというし、<sup>(註74)</sup> 孫抃は王守忠を節度使とする内降があつたとして反対の上奏を行っている。<sup>(註75)</sup> 彭思永は先回りして反対の上奏を行った結果、仁宗の不興をかい、外任に転出させられている。<sup>(註76)</sup> 龐籍も同じく反対の上奏を行った。<sup>(註77)</sup>

そのような雰囲気の中、至和元年（一〇五四）正月、延福宮使、武信軍節度觀察留後、入内内侍省都都知の王守忠は、延福宮使を辞め、武信軍節度觀察留後となる。つまり遙郡から正任に転じたのである。

どうやらこのときすでに王守忠は病に倒れており、病床から節度使への昇進を願っていたようであったが、宰相梁適らの必死の諫止により、<sup>(註78)</sup>正任の留後へと変更されたもののようである。<sup>(註79)</sup>それでも認められないと諸人が反対の上奏を準備していたが、翌日王守忠は亡くなった。<sup>(註80)</sup>

仁宗は、王守忠が病氣休暇を願い出た際、仏僧を王守忠邸に集め、四十九日のあいだ祈祷を行わせ、亡くなったあとには太尉と昭徳節度使を追贈して、安僖（あるいは僖安）と諡し、さらに特別に宮中の鹵簿を使用して葬儀を行わせたという。<sup>(註82)</sup>

以上長くなったが、諸史料から判明する王守忠の事跡である。太子時代から仁宗に仕え、特別に目立った功績はないものの、実直に仕えた結果、最終的に破格の待遇を与えられた人物であった。これほど仁宗に目をかけられ、同時に多くの士大夫から攻撃を受けた人物であるにもかかわらず、現行『宋史』に伝が立てられていないことは不思議といかないようがない。間違いなく、真定王氏で最も高位に昇った宦官であった。

#### 四、王守規（第三世代）、王懷玉・王懷誼（第四世代）

真定王氏の中で唯一『宋史』に伝があり、前章で見たような破格の

大出世を遂げた王守忠の弟にあたるのが王守規である。しかしながら諸書に見える彼の事跡は、実は多くが判明しない。

仁宗朝初期、まだ劉太后が垂簾聽政を行っている明道元年（一〇三二）九月、夜半に禁中で火事が発生した。当時小黃門であった王守規が最初にこれに気づき、寢殿から後苑の門に到るまでの間、諸処の鎖を壊し、仁宗と劉太后を延福宮まで避難させることに成功した。振り返れば、通過した場所がみな灰燼に帰していた、というほどの危うさだったという。翌日、執政大臣らが仁宗に謁見したとき、「もし王守規がここ（延福宮であろう）に導いてくれなければ、卿らに会うことはできなかったであろう」と言ったという。この功により王守規は入内殿頭となり、<sup>(註83)</sup>入内都知・押班の四人と、上御藥から内品までの宦官十五人もそれぞれ昇進したとされる。<sup>(註84)</sup>

おそらく出仕のごく初期に、皇帝と皇太后という時の最高権力者を火事から救うという大功績を立てた王守規であったが、次に判明する事跡まで、実に三十五年のあいだ、彼の行動は具体的に跡を追うことが出来ない。仁宗朝から神宗朝にかけて知制誥、翰林学士を歴任した王珪の手になる制が残され、内蔵庫使の寄資を持ち、榮州刺史の遙郡を得ていることがわかるが、その時期がいつかについては具体的なことが分らない。<sup>(註85)</sup>兄の王守忠の病没を「朕甚だこれを悼む」ため、とする制が残っている。<sup>(註86)</sup>至和元年（一〇五四）に弟である王守規に

も何らかの人事が行われたようだが、それも詳しいことは分からない。『宋史』本伝で、都・開封に流れる汴河と蔡河の治水に成功し、帶御器械となったというのも、<sup>(註87)</sup>それがいつのことなのか時期ははっきりしないのだ。

分かるのは治平四年（一〇六七）末、この年のはじめ英宗が崩じて神宗が即位したため、各地にある歴代皇帝の御容（肖像）を安置する神御殿に英宗の神御（肖像）を追加することとなり、それにともない、殿内の配置を変更する必要があるが生じた。それを調査し、新たな配置を検討するために、西京（洛陽）の宮觀・寺院に派遣されている。<sup>(註88)</sup>このとき彼の官銜は内侍押班であり、内侍省の幹部に昇進していたことがわかる。

その後も王守規の履歴は分からず、熙寧年間（一〇六八～七七）に亡くなったと思われる。享年六十七。最後の官銜は宣慶使、内侍省副都知、康州防禦使であったから、十分に高級宦官になっていた。死後には昭武軍留後が追贈されている。<sup>(註89)</sup>にもかかわらず、以上が彼について現在判明するすべてである。

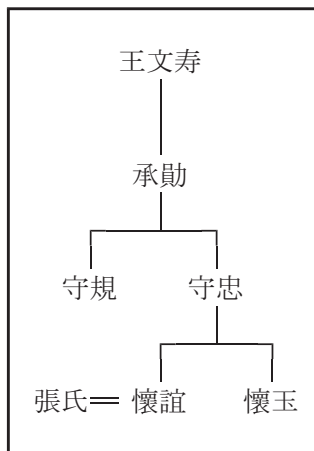
つづく第四世代のことも、ほぼその名が判明する程度である。王守忠死去のとき、弟・守忠に恩典が与えられたことは先に述べたが、それは守忠の息子やその妻にも及んでいた。かろうじて見える史料では、守忠の息子に懷玉と懷誼がいて、懷誼の妻が張氏であることが判

明する。<sup>(註90)</sup>このうち王懷玉は、嘉祐三年（一〇五八）に翌年正月の契丹正旦副使に任じられていることが分かるのみで、遺憾ながらあの事跡は分からない。真定王氏の第四世代は、ほぼ詳細不明であるという方がよいであろう。

## おわりに

諸史料を突き合わせ、現状可能な限り真定王氏四代の事跡を復元し、それが当時の政治状況を踏まえてどのような意味を持っているかについて確認してきた。また、あわせて宦官関係の官職・寄資・遙郡などの官銜について、特にその昇進のさまを具体例として見てきた。

真定王氏は北宋王朝の第二代太宗から第六代神宗にまで仕えた一族であった。第一世代の王文寿は不名誉な死を遂げるなど、一族は出だしから躓いた感があるものの、第二世代の王承勛は第三代真宗に仕えて着実に地歩を固め、養



【真定王氏系図】



父の蹟きを払拭した。第三世代の王守忠は第四代仁宗に早くから仕え、実直な勤務態度が認められて、それまでの宦官が手にしてきた待遇の範疇を超えて、大きく飛躍したといつてよいだろう。宦官の歴史の中でも重要な立ち位置にある人物であつた。

このようにして判明したことは、すでに諸処で述べてきたが、宦官の具体的な履歴を確認することが困難であること。そして現在基本資料としている『宋史』が、生来持つてゐる不備である。そのことは既に指摘されてきて久しいが、王守忠ほどの宦官の事跡をまとまつて立伝できていないところにそれは象徴されている。この時代の宦官を研究するのに必要なのは、現存する史料を地道に集約して彼らの活動を復元し、それらを突き合わせて体系的なものを取り出していくしかない。それを試みて初めて判明したのが、本論で述べた真定王氏の存在であり、彼らは紛れもなく、北宋時代の宦官世族であつた。

# 〔註〕

- 註 1 藤本猛「北宋時代における宦官世族―開封李氏の例を中心に」、『清泉女子大学人文科学研究紀要』四六、二〇一七年。
- 註 2 何冠環『宮闈内外―宋代内臣研究』花木蘭文化事業有限公司、二〇一八年。特に第六篇「宋初高級内臣閹承翰事蹟考」、第七篇「小文臣與大宦官―范仲淹與仁宗朝權閹文應之交鋒」、第八篇「北宋閹氏内臣世家第三、四代人物閹士良與閹安」。
- 註 3 李燾『續資治通鑑長編』（以降、『長編』と略称）卷二二・太平興國六

年十二月。

- 註 4 『長編』卷一八・太平興國二年十月癸未条、卷二二・太平興國六年十二月壬辰条、徐松輯『宋會要輯稿』（以降、『宋會要』と略称）食貨二〇・三・太平興國九年九月条、食貨四九・四・太平興國四年正月。
- 註 5 『長編』卷二一・太平興國五年十月甲午。
- 註 6 『長編』卷七一・大中祥符二年二月己丑。
- 註 7 夏竦『文莊集』卷二六「傳法院碑銘」、『宋會要』道釋二・六・太平興國八年八月十月。
- 註 8 『長編』卷二八・雍熙四年十月庚寅。
- 註 9 大中祥符以前の序列は、内侍供奉官、殿頭高品、高品、高班、黃門の六等であつた。
- 註 10 この乱の経緯については、楊仲良『統資治通鑑長編紀事本末』（以降、『長編紀事本末』と略称）卷一三「李順之變」参照。
- 註 11 『宋會要』兵一・四・至道元年二月二十日、『宋史』卷五・太宗本紀・淳化五年十月庚辰、卷四六六・宦者伝・王繼恩伝。
- 註 12 『長編』卷七〇・大中祥符元年十二月壬子。
- 註 13 『長編』卷七二・大中祥符二年九月壬子。
- 註 14 『宋史』卷六一・五行志「河決、水災」。
- 註 15 『史記』河渠書「西門豹引漳水溉鄴、以富魏之河内。」
- 註 16 『宋史』卷六一・五行志・咸平二年十月。
- 註 17 「都知」「副都知」「押班」は宦官を統括する差遣であり、内侍省・入内侍省独自の階官としては「供奉官」が最高位。
- 註 18 『宋史』卷七・真宗本紀・大中祥符元年正月乙丑。
- 註 19 いわゆる天書事件から泰山封禪までについては、『長編紀事本末』卷一七「封泰山（天書附）」を参照。
- 註 20 『宋會要』方域三・一三「瑞聖園」。
- 註 21 『長編紀事本末』卷一七・大中祥符元年四月辛卯朔。
- 註 22 『宋史』卷七・真宗本紀・大中祥符元年五月壬戌、六月乙未。
- 註 23 『宋史』卷七・真宗本紀・大中祥符元年六月壬寅。
- 註 24 『長編』卷六九・大中祥符元年六月甲午壬寅。

- 一連の儀式その他については『長編紀事本末』巻一九「祀汾陰」を参照。  
 『長編』巻八七・大中祥符九年八月丙子、『宋會要』職官五四・二〇三・大中祥符九年八月。  
 久保田和男「玉清昭応宮の建造とその炎上―宋真宗から仁宗（劉太后）時代の政治文化の変化によせて」『都市文化研究』一二、二〇一〇年。  
 実際には天書の現物は宮中に保存され、玉清昭応宮には玉製の模造天書が安置されたという。『長編』巻八二・大中祥符七年五月乙未条。  
 『宋會要』職官三四・一二・真宗咸平元年四月。  
 『宋會要』職官三六・一三・神宗正史「職官志」。  
 『宋史』巻八・真宗本紀・乾興元年二月戊午。  
 『宋會要』禮二九・一九・歷代大行喪禮上・乾興元年二月二十二日。『宋會要』禮三七・六も同文。  
 このとき最も権勢を誇っていた雷允恭は、劉皇后と合わず、山陵関係の役割から外されていたが、頼み込んで管勾事となった挙げ句、失態を犯し、誅殺されることになる。『長編』巻九八・乾興元年（一〇二二）六月庚申条を参照。  
 『長編』巻一一六・景祐二年二月庚申条。  
 『宋會要』禮五八・九六・群臣諡。  
 『長編』巻七〇・大中祥符元年十二月甲辰。  
 『宋史』巻四六七・宦者伝・王守規伝。  
 『長編』巻一一一・明道元年九月庚午条。  
 『長編』は各箇所で兄・守忠の「本伝」を見ており、基づいた国史・実録に彼の伝があつたことは確かである。それととも「大率本傳載守忠事殊不詳」（『長編』巻一六五・慶曆八年八月壬申条原注）というものはあるが、それでも王守忠伝はあつた（『長編』巻一七六・至和元年正月癸巳条原注など）。それを採らずに弟のみを立伝しているのは、現行本『宋史』の蕪雜さを表すものといえるだろう。  
 張方平『樂全集』巻三八「朝散大夫守尚書戸部侍郎致仕上柱國太原郡開國公食邑二千九百戶食實封五百戶賜紫金魚袋王公墓誌銘并序」、『長編』巻一七六・至和元年正月癸巳。  
 『長編』巻一一八・景祐三年五月辛卯。  
 『長編』巻一九・景祐三年十月癸亥。  
 韓琦『安陽集』巻四七「故崇信軍節度副使檢校尚書工部員外郎尹公墓表」。  
 『長編』巻二六・康定元年二月己丑。  
 韓維『南陽集』巻二九「富文忠公墓誌銘并序」、范純仁『范忠宣集』巻一七「故開府儀同三司守司徒檢校太師武寧軍節度徐州管内觀察處置等使徐州大都督府長史致仕上柱國韓國公食邑一萬二千七百戶食實封四千九百戶富公行狀」、蘇軾『東坡全集』巻八七「富鄭公神道碑」、『宋史』巻三三三・富弼伝。  
 徐自明『宋宰輔編年錄』巻四・康定元年二月丙午条では、富弼だけでなく、三司使晏殊も派遣反対の上奏を行ったという。  
 このことにつき、富弼の墓誌銘・神道碑は、この上奏を朝廷は聞き入れ、王守忠の派遣は取りやめになった、とする（註45参照）。しかし、これに李燾は疑問を挟む。少なくとも王守忠は二月の任命から五月の罷免までのあいだ、陝西で活動を行っていたのであるから、富弼の上奏は二月ではなく、五月になされた可能性にも言及する。『長編』巻一二六・康定元年二月己丑条原注。  
 『長編』巻二六・康定元年二月庚寅。  
 『長編』巻二七・康定元年五月癸酉。  
 『長編』巻二七・康定元年五月戊寅。  
 『長編』巻一三四・慶曆元年十月庚辰。  
 『長編』巻一三二・慶曆元年七月壬戌。  
 『長編』巻一三五・慶曆二年三月甲辰。  
 『長編』巻一三五・慶曆二年四月庚辰。  
 宋祁『景文集』巻五八「荆王墓誌銘」。  
 『長編』巻一四六・慶曆四年正月乙亥、范仲淹『范文正公奏議』卷上「奏議葬荆王」。  
 『長編』巻一五五・慶曆五年三月乙亥。  
 『長編』巻一六〇・慶曆七年六月辛亥。  
 『宋史』巻二四二・后妃伝・仁宗慈聖光獻曹皇后伝。ところがこの事件

- 註 69 註 68 註 67 註 66 註 65 註 64 註 63 註 62 註 61 註 60
- 註 70 註 71 註 72 註 73 註 74 註 75 註 76 註 77 註 78 註 79 註 80 註 81 註 82 註 83
- については、『長編』の当該時期には載せられておらず、曹皇后のライバルであった張貴妃と手を組んだ王賛による陰謀事件のときと、神宗朝に曹皇后が崩じた記事に付されている。『長編』巻一六五・慶暦八年十月壬午、巻三〇三・元豐三年三月。
- 反対に御史何郊らは、副都知の楊懷敏が責任をとらず、現職にとどまっていることを批判している。『宋史』巻三二二・何郊伝。
- 次に見る史料である『長編』巻一六五・慶暦八年八月壬申条原注に引かれる「守忠本傳」では、衛士の変での功績により景福殿使を授けられようとしたが、宮中での騒ぎの責任は入内都知である自分の責任である、として辞退したとある。しかし実録本文の記載と合わないところがあるとして、李燾はこれを採用していない。
- この間、史料に揺れがある。宦官の加官は、下から昭宣使、宣政使、宣慶使、景福殿使、延福宮使となるのだが、何郊の上奏ではこのとき王守忠は昭宣使であるように言っている。それでは一気に三段階の昇進となり、事の性格からしてこれが容認されると思えない。一方『長編』本文ではこのとき王守忠が宣政使であつたとしており（次注参照）、これだと二段階昇進であるため、まだしも穏当であるように思われる。李燾自身も悩んでいる通り、当時あつた史料にすでに齟齬が生じていたのであろう。
- 『長編』巻一六五・慶暦八年八月壬申、趙汝愚『國朝諸臣奏議』巻六一・何郊「上仁宗乞罷王守忠兩使留後俸料」、『宋史』巻三二二・何郊伝。
- 『長編』巻一六五・慶暦八年十一月戊戌。
- 『宋會要』儀制三・二一・慶暦八年十二月二十四日、補編一一三頁。
- 『長編』巻一六五・慶暦八年十一月戊戌、『國朝諸臣奏議』巻六一・何郊「上仁宗論王守忠預紫宸殿上宴」。
- 錢晦は錢惟演の子で呉越王錢俶の孫という名族。『長編』巻一六五・慶暦八年十一月戊戌、『宋史』巻三二二・錢晦伝。ただしこれらは史料として扱うには問題が多い。『長編』原注参照。
- 孔平仲『談苑』巻一、『宋史』巻三二二・何郊伝。
- 『宋會要』儀制三・二一・二二・皇祐元年六月十二日、補編一一三頁。
- 『長編』巻一六八・皇祐二年正月壬子、巻一七二・皇祐四年正月辛亥。
- 『長編』巻一六九・皇祐二年十月癸亥。
- ただし胡宿『文恭集』巻一〇「代中書樞密院乞乾元節用樂第一表」では、皇祐三年、太宗の娘であつた魏国大長公主が亡くなり（『長編』巻一七〇・皇祐三年三月丙子）、翌月の乾元節（仁宗の誕生日。四月十四日）では樂奏をやめることとしたのだが、そのことを中書・樞密院に伝達した王守忠の官銜は単に「入内都知」となっている。書き手の誤り、あるいは伝刻の誤りか。
- 『長編』巻一七五・皇祐五年九月壬辰、『宋會要』職官三六・一〇・皇祐五年九月、范純仁『范忠宣集』巻十五「司空康國韓公墓誌銘」、『宋史』巻三一五・韓絳伝。
- 逆に「今回限り」との言を引き出した俞希孟が、両省都都知就任を容認したものとして批判されている。『長編』巻一八一・至和二年十月己亥、趙抃『清獻集』巻七「奏狀論俞希孟別與差遣」。
- 蘇頌『蘇魏公文集』巻二〇「贈右僕射高若訥諡文莊」、『宋史』巻二百八十八・高若訥伝、『長編』巻一七四・皇祐五年五月乙巳条原注。
- 『國朝諸臣奏議』巻六一・孫抃「上仁宗論王守忠不當除節度使」、蘇頌『蘇魏公文集』巻五五「太子少傅致仕贈太子太保孫公墓誌銘」、巻六三「朝請大夫太子少傅致仕贈太子太保孫公行狀」、『宋史』巻二九二・孫抃伝。
- 『宋史』巻三二〇・彭思永伝。
- 王珪『華陽集』巻四八「推誠保德翊戴功臣開府儀同三司太子太保致仕上柱國潁國公食邑八千四百戶食實封二千一百戶贈司空兼侍中龐公神道碑銘」、司馬光『傳家集』巻七六「太子太保龐公墓誌銘」。
- 王珪『華陽集』巻五八「梁莊肅公適墓誌銘」。
- この間の事実関係も、史料の不備により特定しがたい。『長編』巻一七六・至和元年正月癸巳条原注を参照。
- たとえば陳升之など。『宋史』巻三二二・陳升之伝。
- 『長編』巻一七六・至和元年正月癸巳。
- 『宋會要』禮五八・九〇・群臣諡、儀制一三・一・内侍追贈。
- 『宋史』巻四六七・宦者伝・王守規伝。

- 註 84 『長編』卷一一・明道元年九月庚午。  
註 85 王珪『華陽集』卷四〇「內藏庫使王守規可榮州刺史制」。  
註 86 蔡襄『端明集』卷三〇「入內都知、武軍節度觀察留後王守忠弟守規制」。  
註 87 『宋史』卷四六七・宦者伝・王守規伝「選治京城水，決汴河于公賈村，決蔡河于四里橋，水患以息。加帶御器械。」  
註 88 『宋會要』禮五・一「鳳臺山宮」、禮一三・一「西京應天禪院興先殿」「西京會聖宮」、禮一三・四・神御殿雜錄。  
註 89 『宋史』卷四六七・宦者伝・王守規伝、『長編』卷二八一・熙寧十年三月甲寅、『宋會要』儀制一三・四・內侍追贈。  
註 90 蔡襄『端明集』卷三〇「王守忠男懷玉制」、「王守忠諸婦制」。  
註 91 『長編』卷一八七・嘉祐三年八月辛亥。

## ***The Eunuch Family in the Northern Song Era, with Special Reference to the Wang Family in Zhending***

FUJIMOTO Takeshi

### **Abstract**

Wang Zhong-gui 王忠規, written in the Lives of *Song-shi* 宋史, was the eunuch who was active in the middle of the Northern Song Era, however we can't know his family members when we read Song-shi. As we read many historical materials, like *Xu zizhi tongjian changbian* 續資治通鑑長編, we first know that Wang Zhong-gui was a member of the Wang Family in Zhending 真定, whose members were served the Northern Song Emperors. The first generation of the Wang Family in Zhending was Wang Wen-shou 王文寿. He served Emperor Taizong of Song 宋太宗, especially was in charge of transporting military goods such as food provisions and weapons, and was conducted a number of cultural projects. When he worked in the battle field of Sichuan 四川, he was assassinated by his subordinate officer. The second generation of this Family was Wang Cheng-wu 王承勛, who was the adopted son of Wang Wen-shou. He served Emperor Zhenzong 真宗 of Song, undertook river-improvement and worked for many cultural materials, and gained position better than his foster father. The third generation of this Family was Wang Shou-zhong 王守忠, who was the adopted son of Wang Cheng-wu, he was so serious and honest that the Emperor Renzong 仁宗 and the Empress deeply trusted him. So he was raised to the Runei-neishi-sheng and neishi-sheng liangsheng Dou-dozhi 入内内侍省・内侍省兩省都都知 and got the salary of Jiedu-guancha-Liuhou 節度觀察留後 by special grace of the Emperor Renzong. Though many civil officer criticized him, he himself made an epoch of the eunuch in the Northern Song Era. Song-shi doesn't have a biography of such a great eunuch, Wang Shou-zhong. When we study about eunuch in the Northern Song Era, it is very important to know his career by gathering many historical materials. It was not till I did so in this paper that we knew the Wang Family in Zhending.